横溝正史『悪魔の手毬唄』における横光利一「時機を待つ間」、岡本綺堂「山椒魚」からの影響について

道　合　裕　基

はじめに

横溝正史（1902-1981）は、名探偵・金田一耕助を生み出し、日本ミステリー史にその名を残している。金田一耕助シリーズは、何度も映画化・ドラマ化がなされ、おどろおどろしいイメージが形成されている。そのような横溝の代表作の一つに、金田一が登場する『悪魔の手毬唄』（1957）がある[1)]。この物語で描かれる事件は、「童謡殺人」であり、かつ「見立て殺人」である。横溝が『悪魔の手毬唄』で、「童謡殺人」を採り上げたのは、アガサ・クリスティ（1890-1976）の『そして誰もいなくなった』（1939）やヴァン・ダイン（1888-1939）の『僧正殺人事件』（1929）に触発され、自身も「童謡殺人」を書いてみたいと思ったからである。つまり、『悪魔の手毬唄』成立の起因となったのは、海外のマザーグースを取り込んだ作品群なのである。

横溝は、マザーグースに由来する自己流の「童謡殺人」を描くにあたり、舞台を日本にし、手毬唄という道具立てを用いている。その際に、マザーグースのように歌詞を殺人事件にそのまま活用出来るような童謡が見当たらなかったので、手毬唄自体を一から創作している[2)]。

これまでのところ、『悪魔の手毬唄』については、作中で描かれる農村表象を考察するものや、横溝の民俗学受容の一例を示すという指摘などが発表されている[3)]。本論では、『悪魔の手毬唄』の成立に関わっているであろう横光利一（1898-1947）の短編「時機を待つ間」（1933）と、岡本綺堂（1872-1939）の短編「山椒魚」（1920）との比較を行う。その結果、横光の「時機を待つ間」、綺堂の「山椒魚」から『悪魔の手毬唄』への影響を探ることにしたい。これまでのところ、横光の「時機を待つ間」と綺堂の「山椒魚」との影響関係については詳述されていない。横溝が、自身の創作において、横光と綺堂からいかに受容したか、その痕跡を考察することが、本論の目的である。

1．「時機を待つ間」から『悪魔の手毬唄』への影響

1.1　「時機を待つ間」と『悪魔の手毬唄』について

横光の「時機を待つ間」は、次のような物語である。

【「時機を待つ間」の梗概】

1933年９月、雑誌『改造』第十五巻第九号に掲載された短編である。都会での生活に疲れた主人公・宮木が、次の仕事の繋ぎに叔母のいる農村に赴く。そこで、村の鐘撞の範平に協力してもらい、豪農・剣持家から出資を得て、パナマ帽の生産に着手し、成功するが、範平の女癖の悪さの顕在化、商品の品質低下に悩まされるようになる。結局、製造所は閉鎖され、剣持家は、損害を被り、宮木は農村を去ることになる。だが、村の農民達や範平は、今年・来年は、豊作で安泰だと嘯いている、というものである[4)]。

「時機を待つ間」は、めざましい成果を挙げている横光文学の研究史において、研究が全く進展していない作品である。『横光利一事典』に、「時機を待つ間」の項が見られるものの、粗筋と短評が掲げられている程度である[5)]。この事典の刊行から20年近くが経過しているが、管見の限り、「時機を待つ間」の研究状況は変化していない。つまり、多くの代表作をもつ横光の作品中では、有名ではなく、評価されているとは言い難い作品なのである。しかし、横溝は、横光の「時機を待つ間」を読んでおり、『悪魔の手毬唄』執筆の際の着想源にしている。現に『悪魔の手毬唄』における「時機を待つ間」との関連についての横溝による言及がある。次に引用するのは、『横溝正史読本』における小林信彦と横溝の対談である。

横溝　「中央公論」かなんかで横光利一の小説読んだの。それ、詐欺師が出てくるのね。僕の小説も詐欺師が出てくるからってンで、それで横光利一全集をかたっぱし引っ張り出してきた、短編の部を。そしたら、「時機を待つ間」という小説なんだね、それが……、「これだ、これだ」ってンで……。それ覚えてたのね、詐欺師が出てくるってことを。それに山椒魚が出てくる、それから一生に十三人女房換えた男が出てくるんですよ。ああ、これ借りようと思ったのね。　（『横溝正史読本』p. 95）

横溝は、『悪魔の手毬唄』に詐欺師を登場させることから、詐欺師が登場する小説ということで、たまたま読んでいた「時機を待つ間」を読み返し、作中に登場するモチーフを『悪魔の手毬唄』にも登場させることにしたのである。横光の「時機を待つ間」は、いわゆるミステリーではない。クリスティなどの「童謡殺人」から創作意欲を刺激された結果ではあるが、横溝が、ミステリーではない文学作品を材源の一つとしていることは検討に値するだろう。ちなみに、『悪魔の手毬唄』は、次のような物語である。

【『悪魔の手毬唄』の梗概】

1957年『宝石』８月号から1959年１月号まで連載された。金田一耕助が、静養のために磯川警部の紹介で、岡山県・鬼首村の「亀の湯」を訪れる。この村では、23年前、恩田幾三という詐欺師が、「亀の湯」の女主人である青池リカの夫・源次郎を殺害して行方不明になっている事

件が起きていた。恩田は、モール製作の事業を村に持ち込んでいたのだが、源次郎が、恩田の詐欺を問い詰めに行き、返り討ちに遭ったのである。しかし、源次郎の遺体は、囲炉裏の火によって、顔を損壊されており、本当に源次郎なのかという疑問が残っていた。

こうして、金田一は鬼首村に逗留することになった。鬼首村は、由良家と仁礼家の二大勢力があり、村出身の人気歌手・大空ゆかりが凱旋するというので熱狂状態にあった。かつて、ゆかりは、恩田が産ませた子だったので、差別されていた。金田一は、庄屋の末裔である放庵と親しくなる。放庵の語るところによると、元妻・おりんが戻ってくるという。放庵の言葉通り、金田一は怪しい老婆と遭遇する。だが、金田一は、所用で立ち寄った宿屋でおりんが亡くなっていると知らされる。心配になった金田一が、放庵を訪ねると、放庵の庵に血が残されており、放庵は行方不明となる。

数日後、由良家の泰子が、滝で殺害される。口に漏斗を銜えさせられており、枡から流れた水が注がれていた。さらに、仁礼家の文子が、殺害される。腰に竿秤が差し込まれ、作り物の大判小判が置かれていた。その後、鬼首村には、手毬唄があり、その歌詞通りに殺人が行われていることが分かった。歌詞に従うならば、今後、大空ゆかりが殺害されると推測したが、リカの娘・里子が殺され、鍵と錠前が残されていた。

金田一は、ついに事件の謎を解き明かす。実は、恩田と源次郎は、一人二役で、恩田という男は存在していなかった。源次郎が、浮気をして子どもまで産ませ、満州に高飛びしようとしているのを知ったリカは怒りのあまり、源次郎を殺害し、放庵が隠蔽の入れ知恵をしたのだった。リカは、娘の里子が、源次郎が浮気の結果、産ませた子である泰子・文子・ゆかりよりも不幸であることを怒り、殺害を決意し、放庵を口封じのために殺害したのであった。里子は、母親の犯行であると悟り、ゆかりのふりをして身代わりとなり、わざと殺害されたのである。追い詰められたリカは、農薬を飲み、溜池に身を投げて死亡する。こうして、悲惨な事件は解決した。

手毬唄の歌詞通りに殺人が起こるというインパクトを有し、何度もドラマ化や映画化もされている有名な作品である。では、『悪魔の手毬唄』には、「時機を待つ間」は、どのように受容されているのであろうか。以下に両作を比較していくことにしたい[6)]。

1.2　詐欺師の登場

まず、第一に、横溝の言葉にもあるように、「時機を待つ間」、『悪魔の手毬唄』には詐欺師が登場している。横溝は、詐欺師が登場する作品と解しているが、宮木は、村人たちを欺こうとしていた訳ではないが、結果的に詐欺師同様になる。次に引用するのは、「時機を待つ間」でのパナマ帽事業が失敗したことが確実になる場面である。

> 粗製品の増加に加えて為替の激変のため、予期以上莫大な損失が現れてきた。宮木はそれを見た瞬間、もう彼の考えは何ら躊躇するところがなかった。それは製作所をただ閉鎖するだ

けであった。　（「時機を待つ間」p. 93）

宮木は、事業が失敗したので、新たな事業を起こすために、東京に立つことを決めている。事業は、失敗こそしたものの、危機に対して出来得ることはし尽くした、という思いが、宮木に次の事業を起こす奮起をもたらしている。

一方、『悪魔の手毬唄』にも詐欺師と呼ばれる恩田幾三（青池源次郎）が登場する。磯川警部が、金田一に23年前の事件について語る章の見出しも「村の詐欺師」となっており、横溝の言葉通り詐欺師が描かれている。源次郎も当初は、欺くことを目的とはしていなかったが、世界恐慌の煽りを受けて、モール事業は失敗する。しかし、源次郎は、宮木とは異なり、妻と子を置いて、愛人と満州に逃れようとしていた。次に引用するのは、『悪魔の手毬唄』における金田一の源次郎についての語りである。

「アメリカのパニックのあおりをくらって事志とちがった。しかも弁士のほうはいよいよいけない。そこで半分やけも手伝って、女房子供を生家に預けて、じぶんは新しい愛人とともに満州の新天地へ……と、いうことになったんでしょう。（後略）」

（『悪魔の手毬唄』p. 450）

このことがリカに知られたので、源次郎は命を落とすことになったのである。源次郎が、さらに宮木と異なるのは、一人二役を演じている点である。源次郎は、湯治場の次男坊ということで、村人達から軽く見られていたので、存在しない恩田幾三という男になりすましていたのである。この点からも、源次郎には、自らの存在を偽る者という「詐欺師」的傾向が垣間見られる。

1.3　山椒魚の登場

「時機を待つ間」と『悪魔の手毬唄』には、共通して山椒魚が登場する。この山椒魚についても、先述の引用のように、横溝が言及している。だが、「時機を待つ間」において、山椒魚は、物語の冒頭部分での情景描写の一つにすぎない。それ以降は、登場もしないのである。しかし、横溝にとっては、山椒魚のイメージが強く焼き付いていたらしく、『悪魔の手毬唄』に利用している。次に引用するのは、「時機を待つ間」で、宮木が、範平と一緒に沼の山椒魚を見る場面である。

山椒魚は多くは渓流にいるものだが、ここのは沼かと不思議に思いながら、足を触ればたちまちぬらりと滑りそうな粘土の底にべったり腹をつけて動かぬどす黒いその魚の姿をしばらく眺めていてから、このあたりでは山椒魚は沢山とれるのか訊いてみた。（中略）この魚は見つきは悪いが味の良いことはこれで何とも云えないと説明した。

（「時機を待つ間」p. 55-56）

山椒魚は、この場面以外には登場しないが、範平と宮木が交流するきっかけとなったことが分かる。この少ない山椒魚の描写から横溝は、『悪魔の手毬唄』に借用することを思い付いたのである。では、『悪魔の手毬唄』では、山椒魚はどのように描かれているのだろうか。

『悪魔の手毬唄』においては、先行する「時機を待つ間」に登場する山椒魚を受けて、次のように山椒魚が表象されている。山椒魚が登場するのは、金田一が、放庵の庵内の水瓶の中を覗き込んだ際である。

> 黒褐色の全身のところどころに黒い斑点があり、それに体いちめんにいやらしいいぼである。頭がいやに大きくて、扁平で、しかも、四本の手足が生えている。
> 「まあ！」と、金田一耕助のよすにおどろいて、そばへきて瓶の中をのぞいたおいとさんも、その醜怪な動物をひとめ見ると呼吸をのんだ。「山椒魚ですわなあ」
> 金田一耕助もそれが山椒魚であることをしっていた。しかし、そこになぜ山椒魚がいなければならないのか、それがかれをおどろかせたのである。　（『悪魔の手毬唄』p. 112）

ここでは、山椒魚の外見描写が、「時機を待つ間」よりも詳細になっており、その醜怪さが強調されている[7)]。また、「時機を待つ間」では、宮木と範平が、沼の山椒魚を見ていたのに対して、『悪魔の手毬唄』では、金田一と宿の女将・おいとさんが、水瓶の中の山椒魚を目撃している。後に、放庵が、山椒魚を水瓶の中に入れていたのは、精力増強の食材として使用するためという即物的な理由だったと判明するが、金田一は、「このえたいのしれぬ事件を象徴しているような気がして」（p. 114）いる。

このように、『悪魔の手毬唄』における山椒魚は、「時機を待つ間」での単なる環境描写の一つではなく、事件の不気味さを象徴する生物として描かれているのである。

1.4　何度も妻を変えた男

横溝の発言では、「時機を待つ間」における十三人も妻を変えた男についても触れられている。この十三人も妻を変えた男のモチーフは、『悪魔の手毬唄』での放庵の人物造型に援用されている。すなわち、放庵は、「時機を待つ間」の範平を踏襲して生み出された登場人物なのである。「時機を待つ間」で、範平の人となりは、次のように語られている。

> 範平といって村での名物男で、自分の好みで村の共同湯の風呂焚きをしたり、寺の掃除や鐘撞きをして生計を立てているが、今こそ独身でいるものの、あれでも妻を十三人も変えて来た男だとのことであった。　（「時機を待つ間」p. 58）

範平の十三人も妻を変えたという設定は、『悪魔の手毬唄』での放庵が、八人も妻を変えたという設定に受け継がれている。妻の人数は、放庵の方が少なくなっているが、『悪魔の手毬唄』では、何度も妻を変えた男というモチーフに加えて、「おりん」という元妻の名前をも借用している。放庵は、五番目の妻である「おりん」が、帰ってくることを喜んでいるが、この「おりん」という名は、「時機を待つ間」における範平の十三番目の妻のものである。ただし、『悪魔の手毬唄』での「おりん」が、老婆であるのに対して、「時機を待つ間」の「おりん」は、さほど高齢ではなく、隣に住む川師の家で暮らしている。『悪魔の手毬唄』での「おりん」の人物造型には、結末近くで、範平の所に出戻りしてきた十二番目の妻の影がある。次に掲げるのは、「時機を待つ間」における十二番目の妻が出戻りしてきた場面である。

> 範平の十二人目の老妻が戻って来た。宮木は、大きな顔に海千山千の漢字の深い幾条もの皺の彫られた白髪の彼女が、隣家の水水しいおりんと壁をへだてて坐っているところを見つけると、範平の苦労もまだこれからが坂だと思った。　（「時機を待つ間」p. 94）

ここでは、出戻りする老妻が描かれている。この十二番目の妻と、十三番目の妻である「おりん」とを合成したような人物が、『悪魔の手毬唄』における「おりん」とみなすことが出来るだろう。何度も妻を変えた男、出戻りする老妻、「おりん」という名などから、『悪魔の手毬唄』は、「時機を待つ間」の受容作と言えよう[8)]。

1.5　〈他所者〉、〈異人〉としての宮木、金田一

これまで、横溝が言及している「時機を待つ間」から受容したモチーフなどを概観してきたが、横溝が触れてはいない『悪魔の手毬唄』と「時機を待つ間」との類似性について見ていくことにしたい。それは、主人公達の〈他所者〉、〈異人〉としての側面である。

「時機を待つ間」の主人公である宮木は、新たな事業を起こすための時機を待つ間、叔母を頼り、見ず知らずの村にやってきたのである。いわゆる〈他所者〉である。ここからは、共同体内に属する村人と、その外側に属す〈他所者〉という二項対立関係が抽出可能である。また、宮木の訪れた村は、規模も小さく閉鎖的な共同体である。この村に宮木は、パナマ帽事業を持ち込もうとするのである。この宮木の行動からは、〈富〉の源泉としての〈外部〉、〈富〉をもたらす〈異人〉という性格が見出せる。宮木は、村人達が知らない物質文化、生業を〈外部〉からもたらし、そこから〈富〉を生じさせようと試みるのである。その結果、〈富〉をもたらす存在としての〈異人〉としての属性が顕著になるのである。

人類学者の小松和彦は、〈異人〉を、〈妖怪としての異人〉と、〈人間としての異人〉の二種に大別している[9)]。前者は、伝承中に登場する文字通りの妖怪や、来訪神などの超自然的存在を指し、特定の共同体に属さない旅芸人・商人などの漂泊民を、〈人間としての異人〉としている。この区分に従うならば、「時機を待つ間」の宮木は、〈人間としての異人〉と言えるだろう。現に、

村人達に知らないモノ、商売の方法などを村内にもたらしているからである。だが、宮木は、結局のところ、〈富〉をもたらす存在とはなりえなかった。そのため、事業を閉鎖し、共同体を離れるのである。

一方、『悪魔の手毬唄』における金田一耕助も〈他所者〉である。金田一は、療養のために鬼首村を訪れ、事件に巻き込まれていく。金田一も、宮木同様に〈他所者〉、〈異人〉である。しかし、金田一は、療養目的に鬼首村を訪れており、特に新事業などをもたらす訳ではない。この〈外部〉からの〈富〉をもたらす役割は、源次郎（恩田）に担わされていると言えよう。その意味では、源次郎も、〈他所者〉、〈異人〉性を帯びた存在なのである。

金田一の〈他所者〉、〈異人〉性が端的に示されているのは、共同体内に属すか、属さないかという属性だけではなく、その特異な推理力である。伝承中に登場する〈異人〉は、共同体内に〈富〉、もしくは〈災厄〉をもたらす。正負という相違はあるが、超自然的な力の発現、常人離れした能力などが披露される。『悪魔の手毬唄』における金田一は、〈人間としての異人〉であるが、未解決事件を端著とする現在の事件も全て解決してしまうのである。事件の解決をもたらすのは、金田一の優れた洞察力・推理力である。この常人離れした能力によって、金田一の帯びる〈異人〉性は、強調されるのである。このように、金田一が帯びる〈異人〉性が、事件解決に大きく関わっていたのである[10)]。

宮木、金田一ともに、〈他所者〉、〈異人〉としての性格が見出せ、難事件解決という功績に見られるように、金田一の〈異人〉性が、宮木よりも強調されていたと言えるだろう。

以上のように、「時機を待つ間」と『悪魔の手毬唄』には、横溝の発言通りに、その受容の痕跡が窺えたのである。横溝は、非ミステリー作品である「時機を待つ間」からインスピレーションを得て、『悪魔の手毬唄』における設定やモチーフなどに巧みに活用していたのである。

2.「山椒魚」から『悪魔の手毬唄』への影響

2.1　「山椒魚」について

これまで横光の「時機を待つ間」との関係について、順に見てきた。横溝が、着想源であると明言していることもあり、両テクスト間の影響関係が、細部の比較により明確となった。つまり、「時機を待つ間」と『悪魔の手毬唄』との連続性は、辿ることが出来ると言えよう。

本論では、『悪魔の手毬唄』の成立に関して、もう一つの作品からの影響を指摘したい。それが、岡本綺堂の短編「山椒魚」である[11)]。横溝は、先述のように、『悪魔の手毬唄』の成立について、多くの着想源を披歴している。だが、綺堂の「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』との間には、多くの類似点が見られるにも拘らず、横溝は、「山椒魚」について言及していない。多くの類似が、偶然という可能性も考えられるが、『悪魔の手毬唄』には、「山椒魚」からの連続性が見られるのである。

『悪魔の手毬唄』と「山椒魚」との関連は、触れられていないものの、横溝は、綺堂について

の発言を残している。次に引用するのは、横溝のエッセイ『金田一耕助のモノローグ』の一節である。

> 私が小説らしきものを書きはじめたころ、その文体についていちばん大きな影響をうけたのは岡本綺堂であった。後年自分でも捕物帳を書いたくらいだから、「半七捕物帳」を愛読したことはいうまでもないとして、私はそれより綺堂の怪談物が好きであった。その滋味溢れる語りくちに魅了されたものである。（中略）「ポケット」という、いまの文庫本くらいの大きさの雑誌に綺堂まがいの奇談物を投稿していた。それらの作品のなかには没になったものもあるが、採用されたものも多少ある。私のもっているストーリー・テラー的才能は、岡本綺堂の影響がひじょうに大きいと、私はいまでも思っている。
>
> （『金田一耕助のモノローグ』p. 59-60）

横溝は、綺堂から受けた大きな影響について言及するとともに、怪談物が好きだったということを語っている。綺堂は、『半七捕物帳』シリーズの作者として有名であるが、『青蛙堂鬼談』シリーズなどの怪談物も多く残している。この横溝の発言からは、綺堂と横溝に通底する怪異・奇談に対する興味関心の深さが窺えよう。以下に、「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』とを比較するにあたり、便宜上「山椒魚」の梗概を掲げる。

【「山椒魚」の梗概】

1920年『ポケット』６月号に「山椒の魚」のタイトルで発表され、単行本『慈悲心鳥』（1920）収録時に「山椒魚」に改題された。K君が、学生時代に体験した出来事を語った話。K君は、木曽の方を旅したことがあり、とある旅籠に泊まった。宿には、女学生風の三人連れと二人の学生風の若い男達が宿泊していた。近辺を散策に出かけたK君は、学生風の二人連れが、山椒魚を買っているのを目撃した。その晩、宿で女学生達の寝ている枕元に山椒魚が放たれた。彼らは、イタズラのために山椒魚を購入したのであった。その後、女学生のうち、二人が苦しみ出し、医者の処置でもどうにもならず、亡くなってしまう。こうして警察の捜査が開始され、新聞社の通信員も調べにやってくる。

通信員から聞いたところによると、女学生達と学生達は、お互いに知り合いで、亡くなったのが、藤田みね子・亀井兼子、生き残ったのが、服部近子、学生は、遠山と水島といった。遠山と兼子は、「可怪（おか）しい」関係にあり、疑わしいのは生き残った近子であるが、糸口は掴めなかった。

後日、通信員から、事件は解決したと聞かされる。二人の死因は、沢桔梗による毒殺と判明し、夕食に混入されていたと分かった。実は、死んだみね子が、遠山と兼子の関係を呪い、兼子を殺そうとしたのだった。そして、一人だけ死んだのでは疑われる虞があるので、無関係の近子を殺すつもりだったらしい。だが、途中で気が変わり、自分も死のうと思ったのか、良心の呵責があるので、自分の椀と近子の椀を取り替えたのか、のいずれかであろうという。こうして、事件は

解決したが、通信員は、警察や遺族から頼まれたので、中毒死という記事になると語った。

翌朝、通信員とK君は、一緒に帰ることにした。その際に、山椒魚が売られているのを目撃した。

「山椒魚」は、タイトルに示されるように、山椒魚が効果的に用いられており、木曽で起きた殺人事件について語られている。「山椒魚」については、管見の限り、単独で論じた研究は見られず、綺堂の作品中でも、さほど有名な作ではない。そして、『悪魔の手毬唄』との関連についても、論じられてはいない。そこで、本論では、「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』を比較し、両作のあいだの影響の可能性を指摘したい。では、『悪魔の手毬唄』とは、どのような類似点、共通点が見受けられるのであろうか。以下に、「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』を比較することにしたい。

2.2　山椒魚と沢桔梗

まず、第一に、山椒魚と沢桔梗が、「山椒魚」、『悪魔の手毬唄』の双方に登場していることが指摘出来る。「山椒魚」は、タイトルにもあるように、重要なモチーフとなっている。山椒魚は、イタズラのための道具として用いられている訳だが、事件の不気味さを象徴してもいる。次に引用するのは、「山椒魚」での、K君が、遠山と水島が、山椒魚を買うのを目撃した場面と、結末部分である。

> 盤台の底には少しばかり水を入れて、うす黒いような不気味な動物が押し合って、うずくまっていた。それは山椒の魚であった。（中略）とうとう其一匹を買うことにしたらしい。
>
> （「山椒魚」p. 154）

> 「御覧なさい。あすこでも山椒の魚を売っていますよ。」
> 僕はその醜怪な魚の形を想像するに堪えなかった。それが怖ろしい女の姿のように見えて ──。
>
> （「山椒魚」p. 166）

『悪魔の手毬唄』における山椒魚の描写より、細かくはないが、不気味な生物であることに触れられている。結末では、『悪魔の手毬唄』同様、「醜怪な」という語で山椒魚は形容されている。そして、K君も金田一のように、陰惨な事件の象徴と感じている。つまり、『悪魔の手毬唄』、「山椒魚」は、ともに山椒魚を、事件の不気味さを象徴する生物として描いていると言えよう[12)]。

山椒魚に続いて、「山椒魚」、『悪魔の手毬唄』には、沢桔梗が登場している。ともに、殺害方法の一つして用いられている訳だが、物語中での、その呼称からも「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』の関連性を窺わせている。次に引用するのは、「山椒魚」での沢桔梗についての描写と、『悪魔の手毬唄』における沢桔梗の描写である。

沢桔梗の茎からは白い乳のような汁が出て、それは劇しい毒を有っているので、ここらでは孫左衛門殺しと云って、子供でも決して手を触れないことにしているのです。

（「山椒魚」p. 160）

「毒草……？」と、金田一耕助はあわててそれを土間へすてると、
「なんという草なの、これ……？」
「はあ、あの……はあ、あの……」と、おいとさんは恐怖に顔をひきつらせて、あえぐように呼吸をはずませながら、「よそではなんちゅうておりますかしりませんけんど、このへんではお庄屋ごろしと……」

（『悪魔の手毬唄』p. 106）

「山椒魚」では、「孫左衛門殺し」、『悪魔の手毬唄』では、「お庄屋殺し」と呼ばれている。「山椒魚」では、庄屋に該当する人物は登場せず、殺害もされないが、『悪魔の手毬唄』では、庄屋の末裔である放庵が、沢桔梗の毒を盛られ、絞殺されているのである。横溝は、『悪魔の手毬唄』において、喋りすぎた庄屋を沢桔梗で毒殺したことを仄めかす「お庄屋殺し」の唄も創作しており、「山椒魚」よりも、沢桔梗という植物にまつわる陰惨な伝承を付加している。

このように、「山椒魚」、『悪魔の手毬唄』で描かれる山椒魚、沢桔梗は、物語を彩る怪しい動植物と言えるだろう。

2.3　三人の娘の登場

第二に、「山椒魚」、『悪魔の手毬唄』には、事件と関わる三人の娘が登場している。ただし、『悪魔の手毬唄』では、事件と関わる娘として、リカの娘である里子がおり、正確には四人である。「山椒魚」では、宿に宿泊していたみね子・兼子・近子の三人である。一方の『悪魔の手毬唄』では、泰子・文子・ゆかりである。「山椒魚」でのみね子達は、友人同士であるが、『悪魔の手毬唄』に登場する三人は、源次郎（恩田）が、他所の女との間に産ませた娘である。「山椒魚」での殺人の動機が、他の女との関係を怨んでのことだったように、『悪魔の手毬唄』でも、男の浮気を原因とする陰惨な事件をもたらしているのである。

また、事件と関わる娘の人数が、三人というのは、『悪魔の手毬唄』での重要なモチーフとなる手毬唄に唄われる娘の人数とも重なっており、「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』の関連性を強調している。

2.4　殺人事件の発生

第三に、「山椒魚」、『悪魔の手毬唄』ともに、殺人事件が描かれている。「山椒魚」では、毒殺と犯人の自死であり、『悪魔の手毬唄』では、23年前の事件に尾を引く手毬唄の歌詞に見立てた連続殺人事件である。短編と長編という違いもあり、起こる殺人の数、遺体の発見状況なども大きく異なっている。『悪魔の手毬唄』では、狂気じみた「見立て殺人」となっており、死体の置

かれた特殊状況の描写が細かくなっている。これは、横溝が、マザーグースの歌詞通りに行われる「童謡殺人」に着想を得、自己流の「童謡殺人」を描くことを目的として創作された物語であるので、起こる事件のインパクトはより大きなものとなっているのは、当然と言えよう。だが、「山椒魚」、『悪魔の手毬唄』ともに、殺人事件を描いた広義の探偵小説と言えるだろう。

2.5　犯人の自死

前節とも関連するが、第四に、犯人の自死という共通点を挙げることが出来る。「山椒魚」の犯人であるみね子は、当初、無関係の近子を殺害するつもりでいたが、気が変わり、自ら毒を呷る。一方、『悪魔の手毬唄』の犯人であるリカは、追い詰められ、農薬を飲んだ後、溜池に身を投じる。

「山椒魚」、『悪魔の手毬唄』ともに、犯人が女性で、みね子、リカともに服毒自殺を遂げているのである。ただし、服用した毒物が、沢桔梗由来の毒と、農薬という相違があり、リカの場合は、溜池に身を投げるという要素も付加されている。犯人の最期という点からも、「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』には、共通点が見られるのである。

2.6　〈他所者〉、〈異人〉の登場

第五に、「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』には、共通して〈他所者〉、〈異人〉が登場している。「山椒魚」では、K君、みね子・兼子・近子、遠山・水島、通信員など登場人物の大半が、〈他所者〉である。だが、これらの〈他所者〉達は、共同体内に〈富〉は、もたらさず、殺人事件という〈災厄〉をもたらした。K君は、傍観者の立ち位置にあるが、みね子達は、共同体の平穏をおびやかす事件を起こしているのである。この意味では、『悪魔の手毬唄』での源次郎（恩田）との類似が認められよう。

他方、「山椒魚」で、名探偵である金田一の役割を果たすのは、通信員である。彼は、情報をかき集め、事件の真相を探ろうとしている。そして、事件の真相を知るに至るが、彼が語るように、「半分中って半分外れ」（p. 163）であった。しかも、せっかく突き止めた事件の真相を、警察や遺族の要望で、「中毒死」という記事にしなければならなくなった。その点から見れば、通信員は、金田一に比して、名探偵ではなく、〈異人〉としての常人離れした推理力を発揮している訳ではない。

『悪魔の手毬唄』と同じく、「山椒魚」は、〈他所者〉、〈異人〉を多く登場させながらも、その負の側面が大きく作用していたと言えるだろう。それは、事件が解決するものの、事件の真相が広く周知されることがないということに端的に示されているのである。

以上のように、着想源として特に言及されていない綺堂の「山椒魚」からも『悪魔の手毬唄』との共通した展開、モチーフが見出せたのである。それゆえに、「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』との間にも連続性が指摘出来、着想源の一つである可能性が浮かび上がるのである。

おわりに

本論では、『悪魔の手毬唄』の着想源を探る試みとして、横溝の発言を参照し、横光利一の「時機を待つ間」との比較を行った。その結果、横溝の発言を裏付けするように、多くの設定、モチーフを踏襲していたことが分かった。『悪魔の手毬唄』は、「時機を待つ間」を重要な材源として、創作されたと言えよう。

また、横溝が直接明言してはいないものの、岡本綺堂の「山椒魚」との比較を通して、「時機を待つ間」と同様に、『悪魔の手毬唄』との類似する設定、モチーフを指摘することが可能となった。『悪魔の手毬唄』が、先行する国内外の文学作品を部分的にではあれ、その着想源としていたことを踏まえるならば、「山椒魚」に頻出する類似性からは、着想源の一つである可能性を指摘することが出来るだろう。横溝が、綺堂の「山椒魚」や『悪魔の手毬唄』との関連については、発言を残してはいないが、創作に際しては、綺堂からの影響について発言を残していることを踏まえるならば、多くの類似点を見出せる「山椒魚」と『悪魔の手毬唄』との関連が指摘出来よう。

横光から横溝への影響は、直接、材源とした作品である「時機を待つ間」に言及されているため、その受容の痕跡を探ることは容易と言えるが、綺堂の「山椒魚」については、材源の一つとして言及されていないため、偶然の類似の可能性もあるが、綺堂からの影響を受けて、『悪魔の手毬唄』に「山椒魚」のモチーフを部分的に取り込んだとも解せよう。すなわち、横光からの影響に加えて、綺堂からの影響も『悪魔の手毬唄』に見出せるのである。

本論では、『悪魔の手毬唄』の成立に関して、横光から横溝へ、綺堂から横溝へという連続性について考察したが、他の横溝作品の比較研究を今後の課題としたい。

註

1)『悪魔の手毬唄』の本文は、角川文庫に拠った。

2) 横溝の発言によると、深沢七郎（1914-1987）の『楢山節考』（1956）にヒントを得、鬼首村手毬唄を創作したという。横溝は、作品で用いる適当な唄が見当たらないでいるところ、深沢がラジオ出演し、自分で『楢山節考』中の唄を創作した、と語るのを偶々聞いたので、自分も手毬唄を作ることにしたという。『楢山節考』との関連については、大多和（1996）に詳しい。

3)『悪魔の手毬唄』の農村表象について論じた研究としては、倉田（2012）がある。民俗学からの影響の可能性について論じたものとしては、野村（2006）、小田（2019）などがある。例えば、冒頭に登場する放庵が寄稿していた『民間承伝』という架空の雑誌が、「日本民俗学会」の前身である「民間伝承の会」の機関誌『民間伝承』を踏まえたタイトルであると指摘されている。

4)「時機を待つ間」の本文は、『横光利一全集』第五巻に拠った。引用にあたり、旧仮名遣い、旧字などを改めた。

5)「時機を待つ間」についてのまとまった研究は発表されておらず、『横光利一事典』中の「時機を待つ間」の項、石川（2002）が挙げられる程度である。

6）横溝の作品の比較文学的研究としては、・ウィリアム・フォークナー（1897-1962）との比較を試みた大地（2014）などがある。横溝が、フォークナーからの影響を明言している訳ではないが、「家」、「血による因習」などの両作家の描くモチーフの類似性に注目し、比較分析がなされ、あまり指摘されていない横溝とアメリカ文学との共通性を探っている。

7）山椒魚の民俗的背景については、碓井（1993）に詳しい。山椒魚が、『悪魔の手毬唄』にも登場することが、一言触れられている。

8）妻を何度も変えた男というモチーフは、放庵だけではなく、不倫を繰り返した源次郎（恩田）にも受け継がれているともみなせるだろう。

9）小松（1995）に詳しい。

10）金田一が帯びる〈異人〉性については、高岡（2004）での指摘がある。

11）「山椒魚」の本文は、『岡本綺堂読物集』五に拠った。ただし、引用に際し、旧仮名遣いなどを改めた。

12）「山椒魚」の結末で、K君は、山椒魚に「怖ろしい女の姿」を見ているが、犯人であるみね子や、『悪魔の手毬唄』でのリカを彷彿とさせる。また、リカの最期が、溜池に身を投げていることからも、溜池に生息する山椒魚を連想させる。

参考文献

石川則夫「時機を待つ間」『横光利一事典』井上謙・羽鳥哲哉・神谷忠孝編、おうふう、2002年.

碓井益雄『イモリと山椒魚の博物誌：本草学、民俗信仰から発生学まで』工作舎、1993年.

大多和伴彦『名探偵　金田一耕助99の謎』二見書房、1996年.

小田光雄『近代出版史探索』論創社、2019年.

大地信介「フォークナーと横溝正史：アメリカ南部と日本のジレンマ」『フォークナー：フォークナー協会誌』(16)、松柏社、2014年.

岡本綺堂「山椒魚」『岡本綺堂読物集　五　今古探偵十話』中央公論社、2014年.

倉田容子「横溝正史『悪魔の手毬唄』における農村表象の批評性」『日本文学』61（12)、日本文学協会、2012年.

倉西聡「神戸在住時代の横溝正史（下）L・J・ビーストンと岡本綺堂の影響から」『武庫川国文』(69)、武庫川女子大学、2007年.

小林信彦編『横溝正史読本』角川書店、1979年.

小松和彦『異人論 ── 民俗社会の心性』筑摩書房、1995年.

高岡弘幸「時代の裂け目に訪れる異人 ── 民俗学の視点から」『別冊ダ・ヴィンチ　金田一耕助　the Complete』小嶋優子・別冊ダ・ヴィンチ編集部編、メディア・ファクトリー、2004年.

野村典彦「ディスカバー・ジャパンと横溝正史ブーム」『オカルトの帝国　1970年代の日本を読む』一柳廣孝編、青弓社、2006年.

横溝正史『悪魔の手毬唄』角川書店、1971年.

────『金田一耕助のモノローグ』角川書店、1993年.

横光利一「時機を待つ間」『定本　横光利一全集』第五巻、河出書房新社、1981年.